

交響曲第1番ハ短調 Op.68

ブラームスは生涯に4曲の交響曲を残したが、その最初の作品であるこの「第1番」が完成したのは1876年、ブラームス43歳の時のことである。22歳の時に着手して以来、実に21年もの歳月が費やされたという、これは音楽史上稀にみる遅筆として名高い。ブラームスが作品をなかなか完成できなかった理由は、自作に対する過剰なまでの厳しさと、何より偉大なベートーヴェンの9曲の交響曲の存在だったといわれている。彼は当時「なぜ交響曲を作らないのか」という質問に、「ベートーヴェンの9つの交響曲があるのに、それにつけ加える必要があるでしょうか」と答えたというが、ベートーヴェンの本道をさらに前進させる一步は、それだけ重く、多くの労苦をともなうものだった。

この交響曲を聴いた指揮者のハンス・フォン・ビューローが、ベートーヴェンの9曲の交響曲に続く「第10交響曲がついに現れた!」と絶賛したというエピソードは、広く知られている。実際この作品は、きわめてベートーヴェン的な構成、展開を感じさせる作品といえるだろう。「運命」と同じハ短調で書かれ、「暗く悲劇的なものから、力強い闘争を経て明るい勝利へ」という内容にも、ベートーヴェンの影は色濃い。しかしそれ以上に、ブラームスの音楽的特質がはっきりと刻印されているのは言うまでもない。特に両端楽章の堅固な構成と綿密な筆致は、この作曲家ならではの独特の風格を誇っている。

第1楽章は、重厚で力強い緊張感にあふれた序奏(ウン・ポーコ・ソステヌート)に始まり、情熱的な第1主題と牧歌的な第2主題で構成される主部(アレグロ)が続く。

第2楽章アンダンテ・ソステヌートは、寂寥感に満ちた楽章。後半のヴァイオリン独奏とホルンの掛け合いが美しい。

第3楽章ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソは、ブラームス特有の鄙びた曲想。

第4楽章は暗い序奏(アダージョ)に始まり、勝利を高らかに歌い上げるかのような主部(アレグロ・ノン・トロppo・マ・コン・ブリオ)で、壮麗なクライマックスを築く。

曲目解説: 柿沼 唯 (作曲家)